様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年 ６月１７日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０８２００４５
研究課題名（和文） 『往生要集』注釈書の研究―良忠撰『往生要集鈔』の新出写本を中心にして―
研究課題名（英文） Research of the Commentary on the *Ōjōyōshū*: The Newly Discovered Manuscript of the *Ōjōyōshūshō* compiled by Ryōchū

研究代表者
南 宏信 （MINAMI HIRONOBU）
国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員
研究者番号：80517003

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、源信（942-1017）撰『往生要集』（985 年成立）の注釈書の中で最も評価の高い良忠（1199-1287）の書を、新たに発見した最古の写本に依拠しつつ構成を解明することにある。『往生要集義記』八巻には、後人の加筆が多々見られ、厳密な意味で良忠自身の著述とは言えない。そこで本研究では、それに先行する『往生要集鈔』との相違点を明確化した上で、『往生要集鈔』諸本の全体像を明らかにし、その変遷過程を究明すべく、文献学的な見知から考察を加えた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the structure of *the Ōjōyōshū -giki* by Ryōchū, one of the commentaries on the *Ōjōyōshū* by Genshin 源信. Strictly speaking, the *Ōjōyōshūgiki* is not regarded as Ryōchū's genuine work because it contains additional writings by others. Therefore, by comparing the oldest manuscript of it with *the Ōjōyōshū -shō*, i.e., another commentary precedent to it, I clarified process of how they had respectively transmitted and changed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
２００８年度	1,310,000	393,000	1,703,000
２００９年度	1,060,000	318,000	1,378,000
年度			
年度			
年度			
総 計	2,370,000	711,000	3,081,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、印度哲学、仏教学
キーワード：『往生要集』、『往生要集鈔』、『往生要集義記』、日本仏教、良忠、浄土教、檀王法林寺、東向観音寺

１．研究開始当初の背景

（１）源信撰『往生要集』は平安時代を代表する浄土教の書であり、百六十数部数千巻にわたる経典や論疏から往生極楽に関する要文を集め、観想念仏を中心とする修行を説いている。平安文学においては『源氏物語』や『栄華物語』『枕草子』に内面的な影響が確認されている。さらに『往生要集』の地獄の描写と 1052 年から始まる末法到来の不安が重なり、藤原道長（966-1027）が極楽浄土建立を目指して宇治殿（平等院）を建立する。宇治殿はその子の頼道（992-1074）により鳳

凰堂とまで呼称されるほど日本建築美術を代表する建築となる。絵画では阿弥陀仏の来迎図が描かれていく。

また中世から近世にかけて庶民に対する説教興隆の基となるのもこの『往生要集』であり、近世には度重なる版本が出され、特に寛政二年（1790）出版の絵入本は明治・大正・昭和と出版され、現代に直接繋がる形でも大いに受容されている。

このような、地獄・極楽・末法・滅罪・来迎・説法といったテーマは内面的・外面的に当時の貴族階級をはじめとし様々な人々・各時代に与えた『往生要集』の普遍的な影響は、仏教内にのみ留まることはない。日本文化全体を論じる上においても逸することのできない書である。

一方で、源信滅後、『往生要集』の注釈書が数多く成立していくのであるが、それらを網羅しつつ集大成したのが『往生要集』撰述から約三百年後に活躍した良忠である。この書物は『往生要集』注釈書中において、内容・分量ともにまず依憑するべき代表書なのである。

今までの定説では良忠の『往生要集』注釈書といえば『往生要集義記』を指し、それに基づいて研究もなされてきた。ところがこの書には『往生要集鈔』なる題を持つものが先行して存在しており、『往生要集義記』は、それに増広・修正を施したものである。分量で言うならば一割程度であるが、思想内容や概念の複雑化などを伴う個所もあるので、良忠の『往生要集』理解を知る上においては、まさにこの『往生要集鈔』を読み解くことが必要となる。この点は今まで見過ごされてきた点であり、申請者はまさにこの『往生要集鈔』を読み解くことにおいて『往生要集鈔』と『往生要集義記』の相違を峻別しようとするのである。

なお本庄良文氏と稲田廣演氏から本研究に関する有益な指摘を受けた（「『往生要集義記』第一―訓み下しと現代語訳（八）―大焦熱地獄」、『浄土宗学研究』31 号、2004 年）。

（２）そもそも『往生要集鈔』と『往生要集義記』の二種の系統に大別できることの指摘は、今岡達音氏「記主上人年譜考」（『今岡教授還暦記念論文集』、大正大学浄土学研究会、1933 年）が嚆矢となろう。その後国文学の領域で太田次男氏が「金沢文庫保管古鈔本所引の白氏文集について（中）―「畫西方浄土記」を中心として―」（『金沢文庫研究』通巻 233 号、1975）の註で二系統の内容に一部の相違があることを指摘している。一方で本書の内容研究に関しては大谷旭雄氏「『往生要集義記』について」（『浄土学』36 号、1985）で考察が加えられているが、『往生要集鈔』に言及するものではなかった。つまり二種に大別できることの指摘は以前からされているものの、二系統の諸本の全体像を明らかに示した研究成果はいまだない状況であるといえる。これにより始まった研究で得られた成果の一端を活用した研究には、善裕昭氏「真源『往生要集依憑記』について」（『浄土宗学研究 32 号、2005 年』）や拙稿「『往生要集釈』の構成について」（『佛教大学大学院紀要』35 号、2007 年）がある。

（３）一方、申請者は、時を同じくして科学研究費補助金「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」（基盤（A）平成 15 年度～平成 18 年度）と学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」（平成 15 年度～平成 18 年度）のプロジェクトの一切経デジタル撮影の補助として、金剛寺をはじめ七寺、興聖寺、西方寺、京都国立博物館等各地の一切経を所蔵する寺院・博物館の撮影調査に随行する機会に恵まれた。また後者の中間報告書には分担執筆者として長谷川浩亨氏と共同執筆による「金剛寺蔵『般舟讃』（断簡）」を寄稿する機会を与えられた。個人としては「金剛寺蔵鎌倉写『般舟讃』について」と題して発表をした。また平成 20 年からは学術フロンティアの研究員（PD）として継続してその業務に参加することが許されるに至る。

その一連の一切経の撮影調査先において図らずも新出の『往生要集鈔』の写本を二点確認することができた。

①一点は京都市東向観音寺蔵本である。八冊中三冊のみの現存ではあるが、本書は悲田院を復興し社会福祉事業を行った律宗僧として知られる如導（1284-1357）の筆によることから『往生要集鈔』の現存諸本中で最古のものであることが分かった。『往生要集鈔』の成立後まもなく生まれた如導が、殊更に訓点を付して書写していることからも、『往生要集』注釈書に対する関心の高さが窺える。すでに大塚紀弘氏（日本学術振興会特別研究員）がその存在を紹介しているが、やはり内容には言及していないので改めて比較検討する価値は高い。

②二つめには京都市檀王法林寺蔵本である。本書は八冊揃いの完本であり、状態も良い。外題には「往生要集記」とあるが内容は『往生要集鈔』であり、ここに『往生要集鈔』から『往生要集義記』へと変容していく様相が明瞭に読み取れる資料として興味深い。

２．研究の目的

良忠撰『往生要集』注釈書の研究における最終的な目標は、現存する諸本すべてを比較

検討してその全体像を明らかにすることである。

一部あたりの分量が多いことと、諸本の数が多いことから、対照表の作成には十分な時間が必要となる。この中で本研究が対象とする写本の占める位置は重要である。東向観音寺蔵本は現存諸本に先行する最古の写本となり、一方、檀王法林寺蔵本は『往生要集鈔』の写本系統に属する。この二写本を含む写本系統の検討なくして良忠撰『往生要集』注釈書の研究は成り立たない。よって本研究では二写本を調査・撮影・検討し、他の諸本の比較対照に新たに組み込むことにより、より具体的な良忠撰『往生要集』注釈書の変遷の姿を提示する基礎を築く。また増広箇所を検討することで、良忠の思想、増広者の編集意図を知る。

３．研究の方法

従来は十七世紀の版本の翻刻（つまり『往生要集義記』）をして十三世紀における良忠の『往生要集』理解を論じてきたが、良忠を主にして論じる場合は『往生要集鈔』の諸本の調査・検討を看過することは不可避である。本研究の意義は、その全体像を提示することである。またこの研究は、良忠の著作全般にも言えることである。従来は江戸版本の翻刻のみで論じられ続けており、該当する諸本の文献批判的な研究は十分になされてきたとはいえない。そういう意味において、新たな事実を浮き彫りにしていく基盤を提示することができる。具体的には以下の通りである。

（１）『往生要集鈔』所蔵寺院の調査。以下の二寺院で調査・研究を実施する。
①東向観音寺（京都市上京区今小路通御前通西入上る観音寺門前町 863）
②檀王法林寺（京都市左京区川端通三条上る法林寺門前町 36）

（２）『往生要集鈔』諸本対照表の作成。『往生要集抄』の代表的な諸本の比較対照表を作成する。
①東向観音寺所蔵、（如導書写本、）『往生要集鈔』
②檀王法林寺所蔵（写本）『往生要集記』
③尊敬閣文庫所蔵、貞治二年写（1363）『往生要集鈔』
④佛教大学所蔵（四巻のみ、写本）、『往生要集鈔』
⑤西教寺所蔵、寛永三年古活字版（1626）『往生要集鈔』
⑥京都大学所蔵、寛永五年古活字版（1628）『往生要集鈔』このうち東向観音寺蔵本は上記に先行する写本であり、檀王法林寺蔵本は①②と同様の位置づけになる。この二本を含めた対照表作成は不可避であるので初年度では合計六本の対照表を作成する。

（３）『往生要義記』諸本対照表の作成。
①佛教大学所蔵、無刊記古活字版『往生要集義記』
②佛教大学所蔵、寛永十八年版（1641）『往生要集義記』
③佛教大学所蔵、元治元年版（1864）『往生要集義記』
（４）『往生要集鈔』『往生要集義記』の内容・構成の分析。

作成した対照表をもとに、現存最古の東向観音寺蔵本が示す『往生要集鈔』の構成と、『往生要集鈔』の内容を持ちながら「往生要集記」の外題をもつ檀王法林寺蔵本の構成を整理する。これにより、『往生要集鈔』から『往生要集義記』へと変遷していく様相を検討していく。

４．研究成果

（１）平成２０年度は以下の通り。
①『往生要集鈔』を所蔵する二寺院の調査・撮影の実施。京都東向観音寺蔵『往生要集鈔』(3 冊)と、京都檀王法林寺蔵の『往生要集記』(全 8 冊、内容は『往生要集鈔』)の実見調査、加えて、デジタルカメラによる撮影を専門業者に依頼し、共に順調に遂行した。この作業は書誌的な基礎作業であり、かつ課題として挙げている諸伝本の対照表を作成する上において、必須の作業である。この基礎作業が初年度にあたる当該年度に計画通り実施できたことは望ましい結果であるといえる。

②『往生要集鈔』と『往生要集義記』の諸本対照表の作成。既に入手している『往生要集鈔』と『往生要集義記』の諸本(7 種)にこれら 2 種の写本を加えて、対照表の作成を計画しており、6 本の対照表作成をほぼ完成し、比較検討に着手した。当初この対照表作成の意義は、『往生要集鈔』と『往生要集義記』の 2 系統の相違の全体像を浮かび上がらせることを意図していた。ところが『往生要集鈔』の諸本中においても、増広がしばしば見受けられることが判明し、新たな展開を迎えている。このように特に大部な著作の場合、まずは視覚的に増広を確認できる対照表を作成することは、比較検討の際に有効であろう。

③印度学仏教学会の学術大会において、口頭発表ならびに論文を寄稿した。良忠は、法然(1133－1212)の弟子である弁長(1162－1238)を師とする。系譜的に法然と良忠(1199ー1287)の間に位置する弁長の『往生要集』

理解を考察することは、『往生要集』理解の変遷、特に今中心テーマとして扱っている良忠に対する、弁長の影響を窺う上で、重要なテーマである。

（２）平成２１年度は以下の通り。

①昨年に引き続いて対照表を作成し、ほぼ完成した。また、研究期間中に山梨県身延文庫に『往生要集鈔』（巻七）写本が現存していることを知り、実見調査・撮影を実施した。現在身延文庫本の対照表を作成中である。

②印度学仏教学会の学術大会において、口頭発表ならびに論文を寄稿した。作成した対照表を基に検討したところ、『往生要集鈔』と『往生要集鈔』の増広以外に、『往生要集鈔』の諸本中にも増広箇所が指摘できることが判明した。従来、尊経閣文庫本のみに指摘でき、書写時の脱落の可能性も想定できるので確定的でなかった。しかし東向観音寺本によってこの問題を確定することが可能となり、新たな『往生要集鈔』『往生要集義記』の系統が判明した。

③檀王法林寺本の書写年代は元亨四年（1324、東向観音寺に次ぐ）の書写であり、この他にも書写奥書を有しているので、書写の流れが分かる。弘安十一年（1288、良忠没の翌年）の本奥書を有し、元和二年（1616）に袋中良定（1552－1639）の手元に入る。
　内容は『往生要集鈔』でありながら、題名は後に増広される「往生要集記」を有し、丁数（ページ数）を何度も数えた跡があり、内容も部分的に『往生要集義記』の文章を有する。諸本の変遷の上に配置すると、「鈔」から「義記」に変遷する上で草稿本的な役割を果たしていることが想定される。この成果は今年度秋に学会で発表するべく準備を進めている。

④『往生要集鈔』の周辺資料の調査、加えて浄土宗総合学術大会で口頭発表ならびに、論文を寄稿した。東向観音寺蔵本と同木箱に収められている「端本」が、『往生要集鈔』と同じ著者、良忠撰『浄土宗要集』であることが判明した。該本には先行する『浄土宗要肝心集』があり、これに増広を加えたのが『浄土宗要集』である。東向観音寺本は、書名は『浄土宗要集』であるが、内容は『浄土宗要肝心集』に近似する。しかも一部『浄土宗要集』のみに見られる文を有している。このように、『往生要集鈔』の状況と同様に、良忠撰述の書が複雑な増広過程を経て現在に至っていることが明らかとなった。

⑤期間中にこれらの構造的な全体像の大凡の見当をつけたので、今後、論文寄稿等で具体的に提示する。良忠は浄土宗鎮西派第三祖であるが、このような文献整理が法然ほど顧みられていない状況にあり、まずこのように基礎作業ができたことは望ましい。更にはこれらの文献学的な成果を基盤とした上で、『往生要集鈔』から『往生要集義記』への変遷を、内容的方面から考察することが必須であり、ひいては良忠の思想研究へと展開させていくこと念頭においている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」、『佛教論叢』54 号、p.244-252、2010 年、査読無

②南宏信「良忠撰『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二について」、『佛教大学大学院紀要』38 号、p.31-41、2010 年、査読有
http://archives.bukkyo-u.ac.jp/infolib/user_contents/repository_txt_pdfs/kiyou38b/D038BR031.pdf

③南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『往生要集鈔』について」、『印度學佛教學研究』58(2)号、ｐ.768-771、2010 年、査読有
http://ci.nii.ac.jp/els/110007573610.pdf?id=ART0009397750&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1276661534&cp=

④南宏信「法然門下における『往生要集』理解について－弁長における法然『往生要集』諸釈書の影響－」、『印度學佛教學研究』57(1)号、ｐ.142-145、2008 年、査読有
http://ci.nii.ac.jp/els/110007026820.pdf?id=ART0008951310&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1276661728&cp=

〔学会発表〕（計３件）
①南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」、浄土宗総合学術大会、2009 年 9 月 4 日、大正大学

②南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『往生要集鈔』について」、日本印度学仏教学会第六十回学術大会、2009 年 9 月 8 日、大谷大学

③南宏信「法然門下における『往生要集』理解について－弁長における法然『往生要集』諸釈書の影響－」、平成２０年度日本

印度学仏教学会第五十九回学術大会、2008年9月5日、愛知学院大学

〔その他〕
新聞掲載
①京都新聞（朝刊）2009年12月9日「仏教書註釈本の最古の写本確認「1314 年」記述　上京の寺院」

②京都新聞（夕刊）2010年1月12日「浄土宗要集の最古級写本　上京・東向観音寺」

③教界通信2010年2月1日「良忠上人の古写本も京都・東向観音寺で発見」

６．研究組織
(1)研究代表者
南　宏信　(MINAMI　HIRONOBU)
国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員

研究者番号：80517003

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし